

令和6年度事業報告書

特定非営利活動法人 アニマルクラブ石巻

■事業の成果

長く活動してきて痛感するのは、掛け声だけでは進まない、ということです。「不妊手術を受けましょう」と呼びかけるだけでなく、受けやすくするためにはどうすれば良いのか？と考えて、2008年に『不妊予防センター』を開設しました。カルテは8100枚を超えています。

宮城県が実施している野良猫の避妊・去勢の助成金は、宮城県獣医師会会員病院にしか支給されないため、NPOの病院では使えません。定価が安い病院で助成金が使えれば、手術を決心する人も増えると思い、何度か提言したのですが、受ける権利を獲得することができないまま事業を終えることになる状況です。

近年、老人と猫の相談がとて多く、若い世代だと心の病の人が猫に関わっているケースが多いと感じています。どちらも経済的に困窮している人、自分では問題解決ができない人が多く、低額の分割払いや手術の送迎、術後の預かり、里親探しなど、あらゆる協力や援助をしないと、避妊・去勢手術の実施に漕ぎ着けないのが実情です。支払いが滞る、反故になることもあります。それでも、そういう人だからこそ、手術を受けさせることに尽力してきました。物価高騰で、所得の低い人々の生活はさらに苦しくなり、公的助成のないボランティア活動も存続の危機に直面しています。

20匹余手術して、毎月3千円ずつ返済している人は、「手術したかったけれど、お金が用意できなくて、その間にどんどん増えて、どうしたら良いのか…分からなかった。手術したら、メスが子どもを生まなくなっただけでなく、前は家中オシッコ臭かったのが、オスも去勢したらオシッコ掛けなくなって、家族も揉めなくなった」と喜ぶ姿を見ると、動物のNPOも公的援助が受けられるなら、社会に取り残されている問題をもっと解決できるのに…と痛感します。

約30匹の多頭飼育崩壊状態の老人宅の猫も、1年間かけて手術して、子猫や人馴れした猫には里親を探し、おじいさんの手元には10匹足らずになりましたが…おじいさんが風呂場で急死していたそうです。遠くに住んでいる子どもが来て、家に施錠したので、猫達は外の物置に住んで、近所の人にエサをもらって生き延びています。悲しい状況ですが、避妊・去勢手術してあるから、増える心配はないのが救いです。もらい手のつく子は里親探しをして良かったとボランティアが慰め合うだけでは、いつまで経っても「不幸な動物は救われて当然の世の中」にはならないと思います。

どの議員さんも「誰ひとり取り残さない社会」を掲げますが、人と暮らす動物もその社会の一員と認め、救済の対象にしてもらわないと、日本の動物愛護は一向に進歩しないと感じます。何を望んでも自分達の努力だけでは叶わないので、活動できるうちは、ホームページで活動報告をして、「動物の問題は人の心と社会の問題だから、誰もが解決の担い手」だと伝え、啓発を続けていきます。